藤女子大学人間生活学部紀要，第 50 号：95-102．平成 25 年．
The Bulletin of The Faculty of Human Life Sciences, Fuji Women's University, No. 50: 95-102. 2013.

# 特別支援学校の教育実習における学生の意識について (2)

## ── 期待・不安及び意見・要望に関するアンケート調査から ──

池田浩明　小川　透　武石詔吾

**Abstract**

The purpose of this study is to clarify the awareness of the students who undertook practice teaching at schools for special needs education, as well as the suggestions/requests from the students. The survey was conducted for three consecutive years, and the results revealed the following findings. The student teachers felt anxiety and expectations before the training. They also faced difficulties, but enjoyed themselves during the training. They felt satisfied after the training and they felt that they had grown. Further, the survey results show that the students are highly satisfied with the schools and supervising teachers, and that they wanted to learn "how to prepare lesson plans", "how to conduct lessons", and "how to be prepared mentally for the training" before practice teaching.

### 1　はじめに

本学科では、幼稚園・保育所に勤めたときに、障害のある子どもに対して十分な保育が行えるように幼稚園教諭を基礎免許に特別支援学校教諭免許の取得を選択することができる。免許取得のためには 4 年次に特別支援学校で教育実習をすることになる。図 1 は平成 13 年度からの特別支援学校の教育実習を選択した者の数を示したものである。

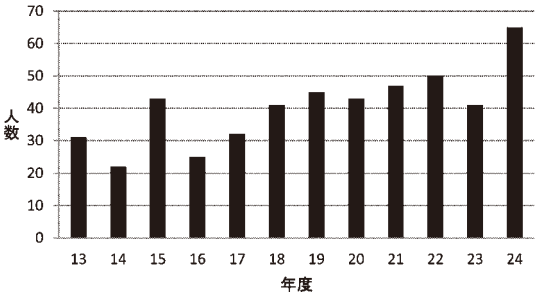


図 1　特別支援学校教育実習選択者数

実習を選択した学生が増えているように思われる。障害のある子どもたちの教育に対する本学科の学生のニーズの高さが示唆される。

これまで、特別支援学校での実習に関する研究では、小方ら(2009)、是枝ら(2007)、坂田ら(2007)がある。小方ら（2009）は、実習生に対する調査から実習において困難を感じたこととして「指導案」「授業」「子どもとの関わり方」「日誌」等をあげた。指導案作成を事前指導に取り上げ、困難さを感じた学生が減少したことを報告している。是枝ら（2007）は、養護学校の実習生への調査から、満足感をもった、成長したとの回答を得たことを報告している。事前指導への要望として、「指導案」「時期」「子どもの対応」があげられている。坂田ら（2007）は、実習生と実習前の障害児・者との接触の乏しさが実習に対する不安に関わることを示唆している。

本学の学生は、教育実習にあたって上記のような不安を感じるのであろうか。その内容は指導案作成や子どもの対応であろうか。これまで学生の

Hiroaki IKEDA　藤女子大学人間生活学部保育学科
Toru OGAWA　藤女子大学人間生活学部保育学科非常勤講師
Shogo TAKEISHI　藤女子大学人間生活学部保育学科非常勤講師

実習に対する意識や実習校・指導教員・大学の講義に対する具体的な意見や要望を聞くことはほとんどなかったと考え、池田ら（2011）は、特別支援学校教育実習を選択した学生の意識調査を行った。結果から、学生の多くが不安と期待を感じながら実習に臨んでいるが、実習後には満足感を感じていたことが示され、実習の意義や有効性が示唆された。この調査では実習校や大学に対する意見・要望についても調査した。

そこで、本研究では、この調査を３年間継続して実施したので、学生の教育実習に対する意識と実習校・指導教員・大学に対する意見や要望について明らかにし、本学科における特別支援学校関連講義の改善・充実について検討することを目的とした。

## 2　方法

保育学科で特別支援学校の教育実習を選択した学生に対して実習前と実習後に自由質問法と多選択法を併用した調査用紙を用いて調査を実施した。事前調査は、実習前の３年次の終わりの事前学習の時間に、事後調査は、４年次の実習終了後大学に戻ったときにそれぞれ個別に調査用紙を配付し無記名で回収した。調査結果は、以下の方法で処理した。多選択法による結果は、１年ごとに集計し、その割合を％で表記し３年間の結果を図に示した。自由記述回答による各設問の記述内容は、３年分をまとめ、KJ 法を用いてグループに分け整理した。各グループにおける記述数を全記述数に対する割合（％）で図示した。

表１　実習選択者及び解答者数

| 年度 | 在籍数 | 実習選択者数 | 実習者率 | 回答者数 |
|---|---|---|---|---|
| 21 | 84 | 47 | 56.0 | 41 |
| 22 | 97 | 50 | 51.5 | 48 |
| 23 | 84 | 41 | 48.8 | 39 |

## 3　結果

### ⑴　調査１「実習前」

①「期待」

「実習への期待度」を図２に示した。

「かなり期待した」と「少し期待した」をあわせると各年度は 75.6、80.4、80.0％であり、３年間とも多くの学生が教育実習に対して多くの期待を持っていることが示唆された。

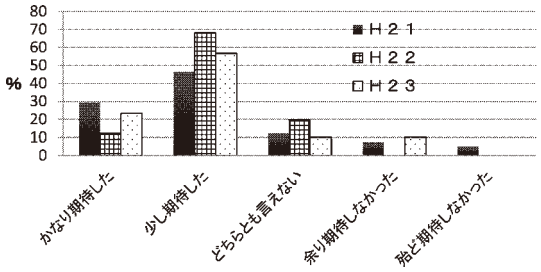


図２　実習への期待度

「期待したこと」に対する自由記述は、「子どもとの関わり」、「実習自体への興味」、「先輩の話を聞いて」、「未知に対する経験」、「新しい学び」等のグループに分けられ、３年間の調査結果を図３に示した。

「子どもとの関わり」は、31.0、35.5、17.4％、「実習自体への興味」は 20.7、19.3、30.4％、「先輩の話を聞いて」は、17.2、12.9、17.4％、「未知に対する経験」は、13.8、9.6、4.3％、「新しい学び」は、13.8、22.7、30.4％であった。

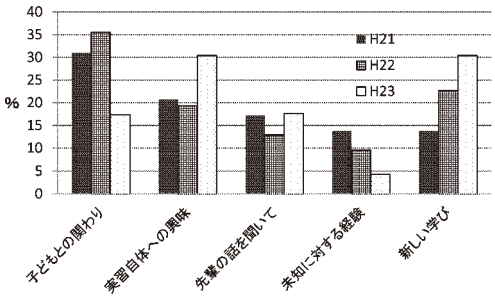


図３　期待の主たる内容

②「不安」

「実習に対する不安度」に関しては、図４の通りである。

「かなり不安」と「少し不安」をあわせると 96.7、95.1、100％でほぼ全員が不安をもっていることが示された。

「不安」に対する自由記述は、図５に示したように「子どもとの関わり」、「実習校のイメージの希薄」、「指導案の作成」、「実習への自信のなさ」、「実習時期」等のグループに分けられた。

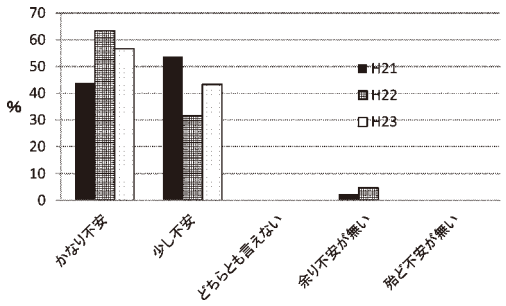


図４　実習への不安度

「子どもとの関わり」は、27.8、17.1、17.2%、「実習校のイメージの希薄」は22.2、21.9、27.6%、「指導案作成」は、22.2、14.0、6.9%、「実習への自信のなさ」は11.1、29.3、44.8%、「実習時期」は6.7、17.1、3.4%であった。

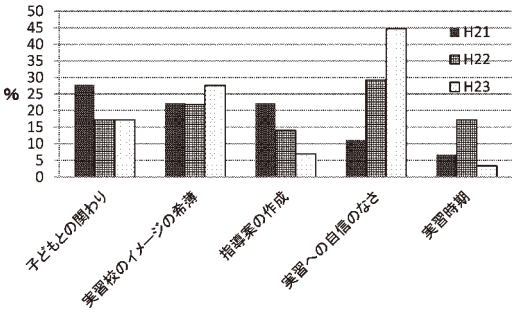


図５　不安の主たる内容

**⑵　調査２「実習中」**

①「楽しかったこと」

「楽しかったこと」に対する自由記述は、図６で示したように「子どもとの関わり」、「授業づくりと展開」、「子どもの理解」、「子どもからの働きかけ」、「子どもと遊んだこと」等に分けられた。

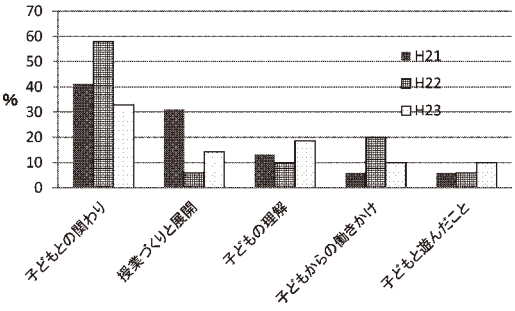


図６　楽しかったこと

「子どもとの関わり」41.1、58.0、31.8%、「授業づくりと展開」31.0、6.0、14.5%、「子どもの理解」は、13.2、10.0、18.8%「子どもからの働きかけ」は、5.0、20.0、10.1%、「子どもと遊んだこと」は、5.9、6.0、10.1%、であった。また、図には示されていないが、３年目の楽しかったことの回答に「教師との関係」が14.8%いたことは注目される。

②「辛かったこと」

「辛かったこと」に対する自由記述は、図７で示したように「指導案の作成」、「子どもとの関わり」、「研究授業の準備と実施」、「通勤」、「指導教官との関係」等に分けられた。

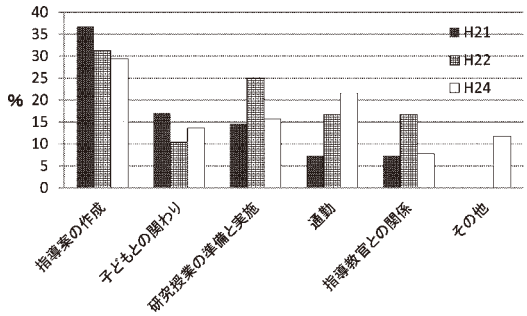


図７　辛かったこと

「学習指導案の作成」は、36.7、31.2、29.4%、「子どもとのかわり」は、17.0、10.4、13.7%、「研究授業の準備と実施」は、14.6、25.0、15.7%、「通勤」は、7.3、16.7、21.6%、「指導教官との関係」は、7.3、16.2、7.8%であった。

③「困ったこと」

「困ったこと」に対する自由記述は、図８で示したように「子どもとの関わり」、「指導教官との関係」、「指導案の作成」、「研究授業の準備と実施」、「指導方法」等のグループに分けられた。

「子どもとの関わり」は、47.3、20.6、20.5%、「指導教員との関わり」は、13.22、9.5、12.8%、「指導案の作成」は10.5、23.5、7.7%、「研究授業の準備と実施」は、10.5、8.8、23.1%、「指導方法」は、10.5、17.6、7.7%であった。その他として通勤や学校環境についての回答があった。

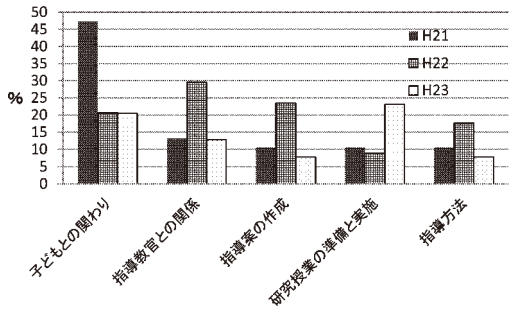


図8　困ったこと

### (3)　調査 3 「実習後」－ 1

①「実習の満足度」

「実習の満足度」に関しては、図 9 の通りであり、「かなり満足した」、「少し満足した」を合わせると 3 年間の推移は 95.2、90.0、92.4%であり、どの年度においても多くの学生が満足したことを示している。

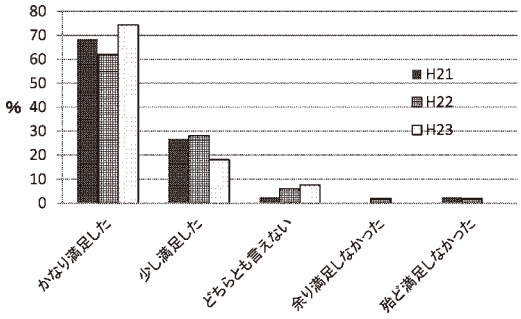


図 9　実習の満足度

②「満足の内容」

「満足の内容」に対する自由記述は図 10 のように「子どもとの関わり」、「授業の楽しさ」、「学びの充実」、「特別支援教育への理解」、「経験の拡大」等のグループに分けられた。

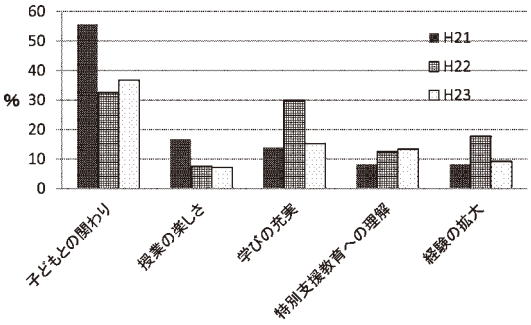


図 10　満足の主たる内容

「子どもとの関わり」は、55.6、32.5、36.7%、「授業の楽しさ」は、16.7、7.5、7.1%、「学びの充実」は、13.9、30.0、15.3%、「特別支援教育の理解」は、8.3、12.5、13.3%、「経験の拡大」は、8.3、17.5、13.3%、であった。

③「実習を通して自分が成長したと思うこと」

「成長したと思うこと」に対する自由記述は、図 11 のように「子どもとの関わり」、「子どもの理解」、「指導方法」、「視野の拡大」、「諦めない気持ち」に分けられた。

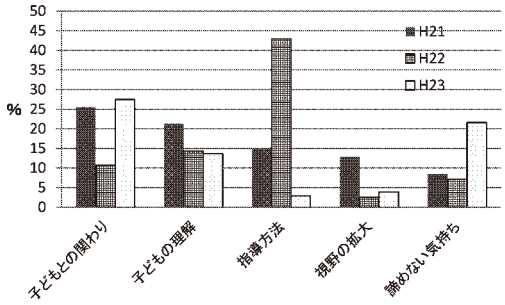


図 11　成長したと思われること

「子どもとの関わり」では、25.5、10.7、27.5%、「子どもの理解」は、21.3、14.3、21.6%、「指導方法」は、14.9、42.9、13.7%、「経験の拡大」は、12.8、25.0、3.9%、「諦めない気持ち」は、8.5、7.1、21.6%であった。平成 22 年度の指導方法（42.9%）、平成 23 年度の諦めない気持ち（21.6%）が多かったことが注目される。

### (4)　調査 3 「実習後」－ 2　学生の自由記述

①実習校への意見・要望

実習校への意見・要望に対する記述数は特になしを入れて 80 あった。特になしは、38.8%であった。全体的な対応に関することは、6.3%であった。そのうち対応に満足したものが 55%、改良してほしい等の意見を述べたものが 45%であった。

「授業に関すること」(研究授業や授業参観など) は、18.8%であった。その内訳は、実習授業回数に関すること、提出物や指導案に関すること、配属学級に関することであった。実習先の教室環境

や控え室の整備などの「通勤・環境」に関することが13.8%であった。「教員に対すること」は8.8%であった。

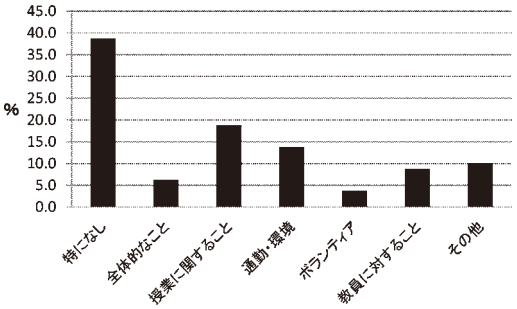


図12　実習校への意見要望の内容

②指導教員への意見

指導教員への意見・要望は全体で128あった。それらは、図13に示したように、「特になし」、「全体的な姿勢」、「授業・指導」、「その他」に分けられた。「特になし」は、51.6%、「全体的な姿勢」は、37.5%、「授業・指導」は、7.8%、「その他」は、3.1%であった。特徴的なことは、特になし、全体的な姿勢を合わせると約90%であり、そのほとんどが、指導教員の真剣さや姿勢に対する感謝等の記述であった。数は少なかったが、実習生の方を向いてほしい、やさしくしてほしい、厳しくしてほしい等の意見もあった。

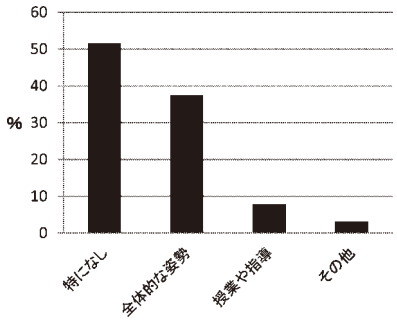


図13　指導教員への意見・要望

③大学への意見・要望

大学への意見要望としては、3年分を合わせて結果を集計した。総数は156で、図14に示した項目に分類しその割合を示した。

「子ども理解」に関することは10.3%、「事前指導」は、12.2%、「学校情報・研究授業・実習」は、14.1%、「大学の講義」は、16.7%、「指導案・日誌」は、23.7%、「その他」（実習期間、服装など）は、10.9%であった。

役立ったもの・意見・要望の中で、役だったものしてあげられたものは、障害理解、事前・事後指導、姿勢、ボランティア、指導案・日誌の書き方等であった。一方、要望としてあげられたものとしては、実際の援助の仕方、具体的な内容、事前指導の時期、指導案・日誌の書き方、講義の時期、ビデオ視聴、実習時期などがあった。

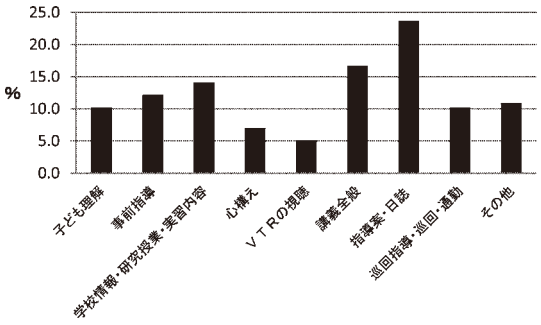


図14　大学への意見・要望

④事前指導に対する意見

平成22年度と23年には事前指導に関して役だったこと・意見・要望を聞いた。その結果を図15に示した。事前指導で役に立った内容として、「指導案」は、37.2%、「回数・時期」は、14%、「心構え」は、16.3%、「実習や授業」は、14.0%であった。

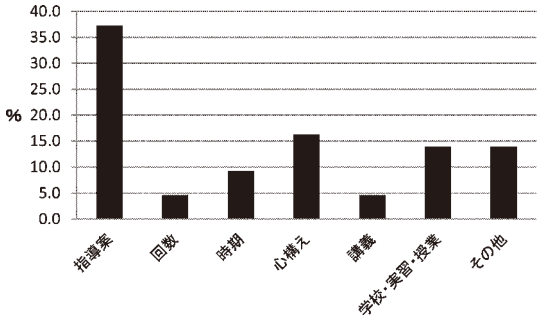


図15　事前指導に対する意見・要望

### (5)　調査4　ボランティア

⑦ボランティア

本学科では、特別支援学校の教育実を受ける条

件として実習前に5回以上のボランティアを学生に要請している。ボランティアについて平成22年度・23年度の学生に役立ったかどうか及び役立った理由等を聞いた。ボランティアの有効性は、図16の通りである。ボランティアが「かなり役に立った」と「役に立った」を合わせると81.8%で、多くの学生がボランティアに対して有効性を感じていることが示めされた。

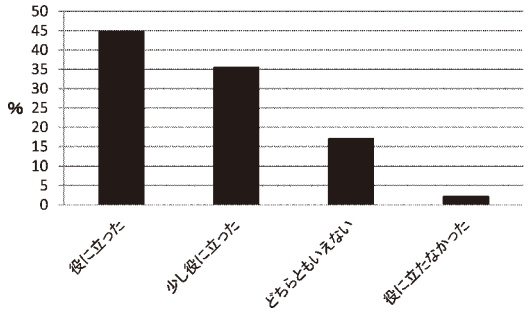


図16　ボランティアの有効性

役に立った理由の記述内容を分類し、図17に示した。「子どもと関わる」は、32.9%、「学校の雰囲気や授業の様子」は、32.9%、「子どもを知る」は、14.1%、「校種、障害種」は、8.2%であった。障害種に関しては、違う障害種の学校だったため効果が少なかったという回答がみられた。

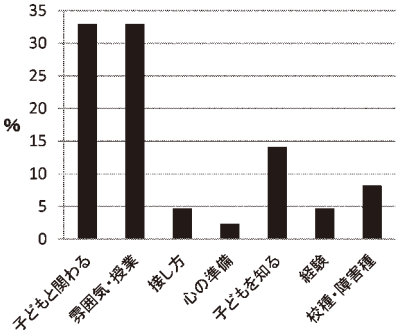


図17　ボランティアで役に立った内容

## 4　考察

### (1)　不安・期待・満足

大野木ら（1996）は、実習に対して抱く不安を、「教育実習不安」として、「授業実践力」、「児童生徒関係」、「体調」、「身だしなみ」の4つの次元から構成されていることを明らかにした。黒崎(2009)は、大学3年生の教育実習に対する意識調査から、「不安」があるものが66%で「楽しみ」の34%を大幅に超えていることを報告した。澤登(2007)は、大学生を対象に実習の期待と不安について調査した。期待については、「子どもとふれあう」29%、「学校を知りたい」25%、「授業力をつけたい」20%であった。不安の内容として、「指導案」34%、「健康」31%、「子どもとの関わり」24%、「人間関係」9%であったことが報告された。田村（2008）は、女子大生に対する調査から実習不安を、「子どもとの関わり」、「教師との関わり」、「親との関わり」、「働くこと」、「知識・技能」に関することに分類した。姫野（2003）は、実習前の不安として「授業の実施」が高く、「教材研究」、「生徒との関係」、「授業案の作成」等において学生は不安を示すことを報告した。本学科の学生も「指導案の作成」や「子どもとの関わり」などに不安を抱いていることが示され、実習に対する不安が学生にとっては普遍的であり、かなり高いことが予想される。しかし、学生は、同時に「子どもとのふれあい」や「実習そのもの」への期待を胸に実習に向かったことが示された。

一方、相良（2005）は、私立女子大学の4年生を対象に意識調査を行い、「満足した」が87.9%という結果を得ている。内田（1999）は、女子大生を対象とした意識調査で、「意義があった」は100%、と報告している。本学科の学生も実習を通して90%以上の学生が得がたい満足感や成長を感じて実習を終えていることが示された。特別支援学校の教員に是非なりたいとの感想を述べる学生もいたように、実習不安は実習を通して子どもと関わり、授業をすることにより満足感へとかわっていくことが示された。特別支援学校での教育実習が意義深いものであることが示されたと考えられる。

### (2)　実習校・指導教員への意見・要望

実習校への意見・要望の調査結果では、「特になし」が4割、指導教員への意見・要望の調査結果では、「特になし」が51.6%であったこと、その他の回答においても肯定的な回答や感謝の気持ちを述べたものが多かったことから実習校や指導教員に対する意識は良好であったことが予想される。

一方、辛かったこと、困ったことの内容に指導教員との関係があげられたことから、実習生の気

持ちは一様ではなく、実習中に揺れ動いたことが予想される。しかし、そのようなことがあったとしても最後には満足感、成長感を持って教育実習を終えたことは、「教育実習」自体が持つ力が示唆される。教育実習は教員養成の集大成であるとする考え方と教職人生の導入とする考え方がある。今回の調査結果が示した学生の心の動きからも、節目の時に教育実習を体験し、多くのことを学ぶ機会となることの重要性、必要性が示唆されたものと考える。

### ⑶　大学への意見・要望

小方ら（2009）は、指導案作成を事前指導に取り入れ効果を示した。内田（1999）は、学生の教職科目への意見として教授法、指導案作成など具体的な教育方法や礼儀・マナーに対する内容を求めていることを示した。瀬戸口ら（2010）は、学生の教職課程への要望として教育現場の具体的な説明や模擬授業などが求められていることを示した。池田ら（2012）は、実習担当指導教員と校長への調査から指導案の書き方など具体的な指導方法内容及び教師の心得を実習生に実習前に身につけてほしいと考えていることが示された。

本調査結果から、上記の研究と同様に本学科の学生は、指導案の書き方、障害理解、心構えを事前指導で求めていることが示された。実習に対する不安を軽減し、実習をより充実させるためには、指導案や実習日誌の書き方、子どもとの関わり方など具体的な指導内容を今後も事前指導等で取り上げる必要があることが明らかになった。

### ⑷　ボランティア

中山（2009）は、小学校の観察実習の効果を検討し、教職への志望意識が強化されたこと、大学の授業参加の真剣さが増したこと、ボランティア活動への参加が増えたことなど学生の意識の変化を明らかにした。姫野(2006)は、学校ボランティア活動の教職志望学生に対する効果について検討し、ボランティア活動の形態により効果が異なることを示唆した。

本研究では、実習終了後に実習した学生に対して実習前の特別支援学校等でのボランティア活動が役立ったかどうかたずねたところ、８割を超える学生が役に立ったと回答している。また、理由として、「子どもと関わる」こと、「雰囲気･授業」の様子が分かる、「子どもを知る」ことができるなどをあげている。本学科ではこれまで継続して実習前にボランティアの経験を学生に求めているが、その有効性が示唆されたものと考える。今後もより有効なボランティアのあり方について検討したい。

## 5　おわりに

4 年次の特別支援学校の教育実習の前後に学生の意識調査を行った。結果からは、学生の多くが不安と期待を感じながら実習に臨んでいるが、実習後には満足感を感じ、教育実習の意義や有効性が示唆された。また、「辛かったこと」以外の問で「子どもとの関わり」に関することを回答した記述が多かったことから教育は子どもが中心であることを改めて感じた。より充実した教育実習とするためには、指導案・実習日誌の書き方や具体的な指導方法・内容及び心構えやマナーについての講義内容が事前指導で用意されること及び障害のある子どもたちとの接触や指導体験を含むボランティア体験の必要性・有効性が示唆された。

## 文献


池田浩明・小川透・武石詔吾（2011）特別支援学校の教育実習における学生の意識について(1)　――実習生の期待・不安・成長に関するアンケート調査から――　藤女子大学紀要　第 48 号　第Ⅱ部　125-131

池田浩明・小川透・武石詔吾（2012）特別支援学校における教育実習改善の基礎的研究(1)――教育実習担当指導教員へのアンケート調査から――　藤女子大学紀要　第 49 号　第Ⅱ部　85-89

内田雅人（1999）和洋女子大学・和洋女子短期大学部教職課程履修学生の教育実習に関する意識調査結果　和洋女子大学紀要．文系編　39　105-127

大野木裕明・宮川光司（1996）教育実習不安の構造と変化　教育心理学研究　教育心理学研究，44，454-462．

小方明子・木下博美（2009）教育実習改善のための取組とその展望――教育実習及び事前事後カリキュラムの開発――　香川大学教育実践総合研究，19，65-70

黒崎東洋郎（20099）主免許実習前の 3 年次生の実践的指導力の基礎――「教育実習基礎研究」後の意識調査を中心に――　岡山大学教育実践総合センター紀要　6 巻 1 号　131-139

是枝喜代治・上田往三（2007）社会福祉系大学にお

ける特別支援学校教員養成の教育的意義について ── 教育実習生によるアンケート調査から ── 日米高齢者保健福祉学会誌，2，307-315
坂田花子・東平明子・江田裕介（2007）付属特別支援学校における教育実習の在り方について探る ── 教育実習生への調査を通して ──　和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要，17，111-119
相良麻里（2005）教育実習に関する課題について：学生の意識調査から　東京家政大学研究紀要　1 人文社会科学　45　67-72
澤登義洋（2007）教育実習事前事後指導の今後の方向 ── 少人数演習形式による教育実習事前指導受講者へのアンケート調査をもとに ── 山梨大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要 12，82-98
瀬戸口昌也・今井航（2010）平成 21 年度教育実習修了生へのアンケート結果　教職への道　No.30，32-35
田村修一（2008）教職志望の大学生の「被援助志向性」と「教育実習に対する不安」 教育心理学会第 50 回総会資料　258
中山博夫（2009）小学校観察実習の教育的効果に関する研究 ── 小学校観察実習後の学生の意識変容の事例に着目して ──　目白大学総合科学研究 5 号　93-112
姫野完治（2003）教育実習の実態に関する基礎的研究 ── 教職志望学生への質問紙調査を通して ── 秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要　第 25 号　89-99
姫野完治（2006）学校ボランティアの活動形態による教職志望学生の学習効果　日本教育方法学会紀要「教育法法学研究」 第 32 巻　25-36